

# 24年前に植えられた114本の桜

## この桜並木は、未来へ残す大野8区の大切な財産です。

塩屋二丁目にある大田神社。この神社を中心に山陽自動車道沿いを走る道路などには114本もの桜が植えられ、春を迎えるこの時期には一斉に咲き誇る姿を楽しめることができます。平成3年、竹下内閣の交付した「ふるさと創生事業資金」を旧大野町では各区に配分。その際に8区では、話し合いの結果、地域の美化のため桜が植えられることになりました。

「植えられた当初は大人の身長にも満たない高さでした。それがここまでの姿になるとは思わなかったです」と桜の木を眺めながら話すのは、当時から世話をしてきた三村譲さん。

「その当時、大田神社が山陽自動車道の建設のため現在の場所に移され、社以外に境内には何もない状態でした。地域にゆかりのあるこの場所にも桜を植えようということになりました」。大田神社一帯は「桜公園」と名付けられ、毎年1回神社境内

内ではさくら祭が行われています。

また、20年程前から桜の咲く時期になるとちょうちゃんがかけられ、夜にはそこに明かりが灯されるようになりました。そのため夜になるとその一帯が薄紅色の明かりに包まれ、幻想的な雰囲気を楽しむことができます。

この美しい桜を残していくため、地域では年2回の清掃活動が行われています。毎回300人以上の地域住民が協力し、その一帯の草むしりや散った花びらや葉の片付けを行っています。また、桜の成長に合わせて当時の役員で、桜が病気になるような薬剤や肥料の散布なども行っていたとのこと。

「うれしいのは、さくら祭の時に、近所に住む高齢の方が坂を登りやってくる。帰りに『ありがとう』と言われた時は、大切に世話をしてきたよかったです」と三村さんは、笑みを浮かべます。

大野8区区長の山本孝史さんは、「この桜はこの地域の大切な財産。まつりには子どもからお年寄りまで集まり、この地域の一体感を感じます。その機会を与えてくれるこの木々をこれからも大切に引き継いでいきたいですね」と話してくれました。



▲場所は大田神社境内。境内にはソメイヨシノのほか、枝垂れ桜も植えられています。また、ここには公園創設時に埋められたタイムカプセルが眠っているとのこと。中には地域住民から寄せられた大野8区の未来を想像して書かれた作文や絵画が入っています。写真は右から三村譲さん(73)、山本孝史さん(72)。

公園完成当初から続く「塩屋さくら祭」。餅つきや太鼓首頭保存会による演奏が行われ、境内での花見も楽しんでいるとのこと。  
とき 4月5日(日)9時30分～13時  
ところ 大田神社境内



平成26年4月 撮影

### 廿日市の桜3 桜尾・桂公園

## 「桜」の名が付く地、桜尾 この地はかつて厳島神社の神領を守る山城があった。



大正2年ごろの桜尾山(現在の桂公園)の様子。当時は海に面した土地でした。文久2年(1862年)から少しずつ開発が始まりました。

写真出典 「図説 つかいちの歴史」



平成26年4月3日撮影

▲桂公園は、市で一番最初に開園した公園。昭和40年代、山の上の部分の部分を切断して、都市公園として再整備されて以来、憩いの場として親しまれています。

「藤原氏が神主職となった承久の乱(1221年)後、そこから約300年もの間、厳島神社を守ってきました。神主とはいいながらも祭祀にはあまり関わらず、武士として社領を維持するための活動をしていました」と廿日市市郷土文化研究会の会長、下見隆雄さんは話します。同会は昭和30年代初めに発足、市の歴史と文化の研究を60年近く研究を続けています。

「今の桂公園一帯は住宅地や道路などの開発が進み、当時の様子をうかがい知ることは難しいですが、文久2年(1862年)にこの山の付近の開発が始まる前までは海に面した土地でした。そのため、桜尾城から宮島までは直線の海路で結ばれ、島を守るための要所であったと考えられます」。

桜尾城は、廿日市の歴史をひもとく上でも重要な土地になってくると下見さん。300年以上もの間、戦乱の中桜尾城から厳島神社を守ってきた藤原氏の功績は大きいと話します。

「当時北九州・中国地方を支配していた大内氏や毛利氏たち。藤原氏の滅亡以降は、この地域の支配者でいようとするとさまざまな勢力による争奪の対象に、この桜尾城はなっていきました」



廿日市市郷土文化研究会会長 下見隆雄さん

「この地が桜の名所として地域に親しまれてきた背景には、地名に『桜』の名が付いていたこともあるのかもしれませんが、昭和40年代の公園の再整備以降には、地域住民の手によって公園に桜の木々が植えられたそうです。春には桜を楽しむのと共に、この地の歴史にも思いをはせてみてはいかがですか」と下見さんは話してくれました。